

## 備前市男女共同参画推進委員便り (市民協働課TEL0869-64-1823)

### 『転んでは起きた二十年』

男女共同参画推進委員  
片山ひとみ



はじめまして。

備前市男女共同参画推進委員を務めて、早や二十年、子どもの成長なら、成人式に等しい時期を迎えます。

当初は、「男女共同参画推進レディ」として始まりました。

就任のきっかけは、一本の電話です。「これからの日本がね、今までの男だから女だからという枠付けから、ガラッと変わり、自分の生き方を選択できる時代へとスタートしたんよ。男女共同参画っていうの。市民の方々に啓発するため、手伝って欲しいんよ」受話器の弾んだ声は、私が大学卒業後勤務していた備前市役所の女性上司でした。



当時の内閣が、「婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」を受け、国内行動計画を策定、内閣総理大臣を本部長に男女共同参画推進本部を設置、全国の市町村にも担当係を設け、彼女は初代係長に抜擢されたのでした。

恥ずかしながら、その時の私は、「男女共同参画」の言葉も意味も知りませんでした。

ただ、その頃、小学一年と幼稚園児の二人娘の子育て真っ最中、将来、彼女たちが自分の目指す道や抱く夢を女性だからと諦めたり、阻害されたり、芽を摘まれることがないようにと願う一心で、快諾いたしました。



子育て中の女性三人で始まった推進レディでしたが、まず、自分たちが男女共同参画を説明できる人間にならなくてはなりません。

夏の盛り、岡山県生涯学習センターでの講座に朝から夕方まで通い、県のアドバイザーを取得、様々な講習会で勉強を重ねました。

また、内閣府による東京での「全国ヤングリーダー会議」宿泊研修で、各地から集まった男女共同参画の旗振り役を担う人々の情熱に刺激を受けてからは、県外の参画施設訪問、日本女性会議への参加、広報びぜんでの男女共同参画特集を執筆、市内で活躍する方々へのインタビューなど、自分の学びを啓発として還元したい情熱に

溢れていました。

さらに、推進レディ三人だけで室内劇団を結成、誕生記念作品は、『小泉家の食卓』と題し、頑固な父親に振り回される家庭の姿を私が拙い脚本を書き、監督、演出、出演もしました。依頼された会場で公演するたび、照れを捨て父親に扮していたのを思い出します。



やがて、室内劇団は、大きな劇団「虹」へと発展してゆきます。

神輿の担ぎ手が不在な町で立ち上がる女性たちの勇姿、『ワッショイ!』、靴屋へ嫁いだネイリスト志願の女性の葛藤を描いた、『ベイビー』、社交ダンス教室が舞台の『レッツ! ダンス!』、女性らしさを隠して生きる少年の学園物語、『新・デレラ』など、劇団「虹」のテーマである「男女共同参画」に合わせ、数本の脚本と劇団歌を書きました。

その一つ、『大きくなったら』は、たくさんの小学校で公演され、脚本が、岡山県の先生方の男女共同参画指導の資料として採用されたりもし、手応えを感じ始めていました。

しかし、世の中は、まだ、この流れに追いついていなかったのです。

広報びぜんに男女共同参画特集を組むたびに、「仕事で疲れて帰宅した男性に、家事までしろというのか」、「男性がゴミ出しするなんて、みっともない」、女性からも、「主人にスーパーのカゴを持たせるなんて申し訳ない」、「昔から、男子厨房に入らずですよ」などの批判も数知れず寄せられ、気持ちがへこむこともしばしばありました。DV防止ポスターを掲示すると、それを覆うように、別のポスターを貼られたこともあります。



因習尊重を覆すという誤解、本来の意味の理解までには相当な時間を要する予感はしていたものの、備前市の地域性に沿って啓発していく難しさをひしひしと感じていました。

それでも、推進レディは、推進委員として名称を変え、男性も加え、くじけずに一步步成長を続けていったのでした。